

ハイマダラノメイガ

1 形態と生態

- (1) 近年、全国的に発生・被害が増加しているアブラナ科野菜の害虫で、ダイコンシンクイムシとも言われています。ダイコン、キャベツ、ハクサイ、カブなどの重要害虫ですが、埼玉県ではブロッコリーやコマツナでも問題となっています。
- (2) 成虫は、体長7~10 mm、開張時約 16 mm、全体に灰褐色の蛾です(写真1)。幼虫は生長すると 15 mm前後になり、頭部は光沢のある黒色、胴部には淡黄色で赤味を呈する縦線が数本あります(写真2)。
- (3) 産卵された卵は、3日(25℃)から5日(20℃)でふ化し、ふ化幼虫が作物の芯部の柔らかい葉肉に食入します。幼虫は成熟すると地表面に移動し、砂や土を糸で綴った繭を作り、この中で蛹になります(写真3)。蛹は6日(25℃)から13日(20℃)で成虫になり、羽化の2~3日後から産卵を始めます。



写真1 成虫



写真2 幼虫



写真3 蛹

2 被害の様子

主に幼苗期から栽培初期にかけて幼虫が作物の生長点付近の葉や芯を加害します。加害がひどいと芯止まり状態になるため、著しい生育抑制や減収等の深刻な被害をもたらします(写真4、写真5)。



写真4 ブロッコリーの被害(芯止まり)



写真5 コマツナの被害と幼虫

3 発生について

- (1) 関東地域では年に4～5回発生します。
- (2) 夏期の気温が高く、降水量が少ないと発生が助長されます。
- (3) 夏期から初秋にかけて播種または移植する作型で被害が大きくなります。
- (4) 寒さに弱いため越冬虫が少なく、春の発生は5月下旬頃からわずかに認められる程度で、盛夏期以降に急増してきます。
- (5) 本種は、アブラナ科植物の他、クレオメ(フウチョウソウ科の草花)にも好んで寄生します。そこで、クレオメに寄生するハイマダラノメイガの幼虫の生息数を調べると、幼虫の生息密度のピークは8月中旬、9月上旬および9月下旬～10月上旬の3回認められ、このうち9月上旬の生息密度が最も高くなりました(図1)。アブラナ科野菜の被害もこの時期に最も多くなります。

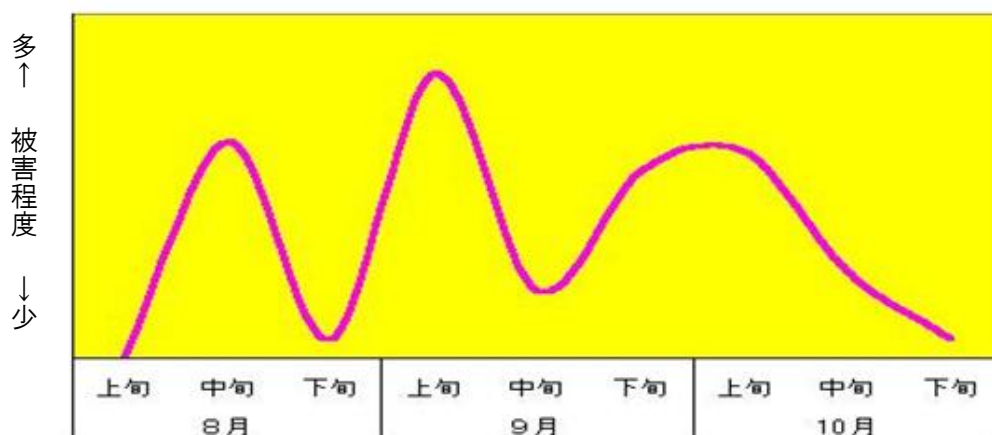


図1 埼玉県におけるクレオメでのハイマダラノメイガ幼虫の生息密度の推移(2002年)

4 防除時期と防除方法

(1) 耕種的防除

- ア 夏期が高温・乾燥条件に移った場合は、多発生が予想されるので、播種を9月上中旬にずらします。
- イ 育苗時の苗は寒冷紗等(2～4mm 目程度の防虫資材)で被覆し、成虫の侵入を防止します。

(2) 薬剤防除

対象となる作物に登録のある薬剤を使用して、育苗期から本ほ生育初期に防除します。薬剤の散布に当たっては、特に芯部に十分かかるように散布します。

薬剤防除を実施する場合は、

- 最終有効年月内の農薬を使用し、ラベルに記載されている適用作物、使用時期、使用方法等を必ず確認してください。
- 適切な薬剤を選択し、病害虫が抵抗性を獲得しないように、同一系統薬剤の連続使用を避けてください。
- 農薬を散布する際は飛散しないよう対策を講じてください。

■ 発行 平成28年2月 埼玉県農産物安全課、一般社団法人埼玉県植物防疫協会

■ 問合せ先(原稿執筆)

埼玉県病害虫防除所 TEL048-539-0661

埼玉県農業技術研究センター生産環境・安全管理研究担当 TEL048-536-0409



©埼玉県 2005

彩の国埼玉県